



## 随想（その3）

### 山口昭一

Shouichi Yamaguchi

1927年 神奈川県横須賀市に生まれる  
1950年 東京帝国大学工学部建築学科卒業  
1952年 (株)東京建築研究所入社  
1982年 同 代表取締役社長  
2003年 同 代表取締役会長として今日に至る

## 若き日の思い出

Memories of my youth

### 「構造家懇談会」発足とその前後

Structureの創刊号には“構造家懇談会設立”に至る志しと今後の発展についての期待等がよくまとめられている。いま読み返して感無量である。約30年前の記録で若き日と言うには近すぎるくらいがあるが、お許しいただきたい。私が井上博さんより、構造設計界の危機感をこのままにして良いのか、何か行動を起したい。といった電話を受けたのは1980年11月頃だったと思う。その時私が“もう遅い”と開口一番に言ったようだ。そのことは後になって何度も彼から遣責の意味を込めて聞かされている。何故このような発言をしたのか、実は説明をしなくなかったし、怠ってきた。今から思えば迂闊な一言ではあるが、当時、構造設計・監理業務に絶望し、廃業したいというより、将来に向かって持続が難しいと私なりに真剣に考えていたからだったと思う。何故そう考えるようになったのか。

事務所での業務内容が激変したわけでもなく、業務そのものが面白くない訳ではなかった。しかし大規模化する業務上の責任、即ち設計ミス等に対する社会的責任だけでなく、事務所運営上の責任も重く、これに耐えられないのではといった、一種の恐怖感にかなり慄いていたからである。

今まで無我夢中で働いてきた過去の実績が必ずしも将来を保証するものではないこと、も当たり前のことだが、分ってきた。旧建築家協会の設計・監理報酬規定が公正取引委員会より、廃除勧告を受けるに至ったこと。これに

代わる1206号告示に至る過程で建築16団体の協議での専門分野別報酬が棚上げされたことなども私の心を暗くした。これらの苦悩を多少口にしていたと思うが、誰も相手にしてくれなかったこと等が雑然として脳裏を駆けめぐり、“もう遅い”に繋がったと思う。その後は井上博さんの説得に共感し、構造家懇談会の設立に力を注ぎ約20年間、多くの先輩、友人に支えられながら、JSCAの発展に向けて努力した。また多くの後輩がその後を引継ぎ、現在の姿になっている。

しかしながら、先ほど述べた約30年前に悩んだ私の不安は、残念ながら今なお続いている。一言に集約すれば、目指した職能（プロフェッション）の社会的認知の道が程遠いという事になる。これらの考え方が古くさく現代に合わないのか、いや社会の文化の問題で変革には時の長さが必要なのかと大変悩ましい問題である。

何れにしても解決のための努力は続けなければならないが、私達の世代の努力が結果として不十分であったことを、後輩の皆さんにお詫び申し上げなければならない気持ちで一杯になる。

設立に当たっては、多くの恩師と先輩の強い協力が得られたことは忘れられない。Structure創刊号とそれに続くいくつかの誌を読み返し、その熱さが身に迫る。これと反対に鋭い指摘もいただいた。

構造計画研究所の服部さんを井上博さんとお訪ねしたときである。服部さんは、“そんな生ぬるい仲良しクラブのような集まりには興味がない。入会はごめんだ。”という主旨のことを言われ、

あまり反論の余地がなく退いた。しかし、主力所員であった寺畑さん、岡部さんには、献身的な協力をいただいた。勝手な推測をさせていただくと、秒速で進む電算の世界で大活躍をしておられた立場として、仲間と協調というより、如何にして仲間一步先んずるか、の厳しい戦いの中に身を置いておられた体験からの発想であろう。しかし、私達の業務は、本当はよく分からない材料を使い、当たらずとも遠からずといった外乱を想定し、美しく豊かな空間、安全安心な空間を長期に渉って保証するモノづくりであり、ひとつひとつの成果がすぐ評価されない。時が経って、あれは良かったとか、失敗だったとか、言い換えれば成果を測る一義的な尺度をもたない場で、誠心誠意を尽くすこと以外に頼れるものがない世界で苦悩を強いられている集団として、極端な表現をすれば血で血を洗う競争社会はなじまないと自らを説得したが、強い一撃であった。

### 太田和夫さんの友情

構造家懇談会設立の当時、太田和夫さんは、(社)日本建築士会連合会会長をしておられた。温厚なお人柄と、ズバリ明晰な発言に常々多くの人から尊敬されていたが私もその一人であった。構造家懇談会設立披露会での祝辞の一節に「こういう職能というものは必ず団体を作るものだそうです。これはあらゆる種類で、建築ばかりではないのです。産業革命以来新しい職能がでてきたけれど必ず団体を作るそうです。その第一段階はまず名前を変えるそう

です。そして初めのうちはやはり会員の知識や技術を磨くことに非常に専心したり、その職能の保護と申しますか職能人としての教養を高めます。やっているうちにだんだんと最後は法律によってその職能の資格を求めることに必ず移るものだそうです。これはヨーロッパでもアメリカでも皆そうだそうです。そして政治運動にもっていくと政治家の方が待ち構えてよきた、と必ずそうなるものだそうです。これは『現代のプロフェッション』という本に書いてあります」と淡々と述べられているように、何事も偏らず正論を簡潔に述べられるお人柄が私にとって恐ろしいほど魅力に満ちた方であった。

1991年7月に突然お電話をいただいた。用件は二年前に亡くなられた横山不学さんのことで、JSCAに相談に乗ってほしいとのことである。太田さんの心は、直接親族がおられなかった横山不学さんのお墓(功績)をどうやって守ってあげられるかであったと思う。太田さんの想いは実らなかったが、後日メモをいただいた。太田さんは遺産の一部を基金とした横山不学賞を設けることで友人の功績を次世代に伝えることができれば最善とお考えになったようだ。このメモは、学友へのおもいやりとJSCAへの声援を願った大先輩の心の一端を表すものとして、大田先輩の想いが表れているように思えた。

忘れられぬ人 阿部宏正さん

阿部さんの訃報に接したのは2008年11月17日である。この頃の私は、或る事件の解決に向かってほぼ全力をはき出しており、甲意を表す機会を失い今に至っていることが大変心残りである。

阿部さんとの面識は1981年の2月頃、構造家懇談会の設立準備中からだったと思う。代表という大役を引き受けられた矢野克己さんの支援役としてご登

場いただいたような気がする。これ以来20数年に涉って、JSCAの背骨として、あまり目立たないがしっかり役を支えてこられた。私たちは気持ちの良い仲間と云え、それぞれの方は当然のことながら立場も違うし、考え方も同じではない。この中にあって、阿部さんは独特の中立的精神から、上手に意見の集約へと導く技は、見事であったと思う。私にとって将を射ようとすれば、その馬を射よ、のたとえに従って、先ず阿部さんの同意を求めたことが多かった。永松繁彦さんの専務理事退任の後任として、私は阿部さんを強く推した。勿論支持者は多いこともあって、私は交渉の役を務めた。彼は条件として、70才まで務めさせてもらいたいとの希望を示された。先のことは分からないにしても、無条件でこれを受け入れた。何がなんでも彼に代わる適任者はいないと信じて疑はわなかったし、彼はそれに答えてくれると信じていた。

阪神淡路大震災の後、JSCAは災害対策委員会を急遽設置し、当面の問題の対応として被害建物の被災度判定や、米国調査団の受入れ等、かなりの社会活動をした。このとき私は米国調査団の案内で、数日を現地で過ごした。たまたま芦屋浜を歩行中に偶然にも阿部宏正さん親子に出会った。自然災害の恐ろしさを、子供に身をもって教えたかったのであろう。エライと思った。地味に見えるが、真の心の強さを私に教えて呉れた。

改めて冥福をお祈りする。

終わりに当たって

あってはならない事件を経て、設計者、特に専門性の強い構造設計分野での制度のあり方が社会問題として大きく取り上げられ、建築基準法、建築士法の改正に及んだ。結果として構造設計一級建築士が生まれ、設計手法、特

に電算プログラムの誤用防止策などを含め建築確認のより厳格化が図られ、行政から見れば一件落着、行政の社会的責任を果たしたことになった。しかしこれで良いのだろうか。

いつも同じことを言うことになるが、構造設計行為は、たとえば医療行為、どちらかと言えば外科医に類似していると思う。患者の生活の快適性や生命を脅かす病素を、高度な知識、経験を一本のメスに集中し自らの責任で病素を切り取る技に類似している。一瞬の猶予もなく、もし間違えば取り返しのつかない状態が起こる、などが類似しているからである。

JSCAが折に触れて、職能を主張する根拠はここにある。ひとたびメスを握れば、ただひたすらに、己を信じ、一切の邪念を排除し患者に集中する医療行為は、私が心がける構造設計行為の真髄である。

最近、「建築の構造設計 そのあるべき姿」(日本建築学会)を読んだ。これをまとめられた和田章さんから、“問題をつめてゆくと、設計者は聖人君子でなければならなくなり現実を離れる。しかしその辺の問題にはふれず、ひたすらそのあるべき姿を追った。”との言葉を頂いた。まったく同感である。しかし、少なくとも、設計行為中は“聖人君子になってほしい。”が私の願いである。

TVなどで神の手と賞賛される方が最後に言われるのは、“患者の喜びが精進の支えになる”である。私たちには、このような環境が用意されていないのが辛いのだが、社会の安全、安心を担う重要な職責にあることを誇りにして精進していただきたい。